
大和国草子

森田カズキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大和国草子

【Nコード】

N5647C

【作者名】

森田力ズキ

【あらすじ】

大和国一の武の名家の当主、「武蔵野夢路」は、予知能力のある「不破の巫女」と政略結婚させられることに。しかし、夢路は男色というわけでもないのに巫女との結婚を拒む。果たして、その理由とは・・・。

序章

あるところに、「神山」という一族が治める「大和国」という国があった。

神山は統治力が大変優れていたので、大和国の人々と、二つの強大な一族を束ねることを許されていた。

一つは「不破」。予知能力に優れた「巫女」を頂上とし、その力で国に降りかかる災いを長きにわたり防いできた、名高き一族である。

そしてもう一つ、「不破」のように予知能力を持つ者はいないものの、武の力で神山を支えてきた「武蔵野」

彼らの中にも、頂点に立つ者がいる。不破と同じく、その者だけが、受け継ぐことを許された名がある。

「武蔵野 夢路」

この物語は、現在「武蔵野 夢路」の名を受け継いだ者の、行く末を描いたものである。

序章（後書き）

つたない文章を読んでいただきありがとうございます。

自分でもジャンルがよくわかっていない作品ですが、暖かい目で見
てやってください。

第一章：脱・独身〜失った真人間〜（前書き）

今回は漫画やアニメのパロディが数回でできます。なので、パロディ嫌いな人はその辺を理解して読んでください。

BL描写があるわけではありませんが、本文中に「男色」という言葉がやたらと登場します。言葉も見たくないという方は、読むのをやめた方がいいかもしれません・・・。

第一章：脱・独身く失った真人間く

「不破の巫女」に比べると、その歴史は浅い「武蔵野 夢路」の名であるが、現在は二十一代目と長い歴史となっている。

その「武蔵野 夢路」は、本日は、現在の神山の長に呼ばれ、神山の城まで赴いていた。

「夢路・・・そなたも知っておるだろうが、最近我らを消してしまおうと考える者達がいる」

現在の神山の長「綺羅」は、美しい黒髪を持つうら若き青年で、憂いを帯びた悲しげな表情が、彼の顔を更に魅力的なものにしている。

しかし、そんなそれに対し、夢路は強い口調で答える。

「最近だと？神山を狙うヤツはいつの時代だっているだろう。今更、急に沸いてきたみたいに言うんじゃないよ」

憂いを秘めた表情の神山とは対照的に、燃えるような赤い髪を持ち、今にも怒り狂いそうな表情の夢路を夢路の付き人、琥珀が心配そうに見つめる。

「そうだな・・・すまぬ夢路。いつの世も、我ら神山は憎まれ者よ。我らが信頼できるのは、今となっては不破と武蔵野だけ・・・」

武蔵野、と綺羅が口にした瞬間、夢路は釘を刺されたような感覚を覚えた。今の綺羅と目を合わせてはいけないと、俗に第六感と呼ぶものが、自身に警鐘を鳴らしてやまない。

綺羅は、夢路が冷や汗をかいていることには気にせず、続けて、話し始めた。

「そこで思ったのだ。今こそ、我らの結束を強める時ではないのかと」

「で、何だ。円陣でも組ませる気か？」

「円陣か・・・近いかもしれぬ」

円陣、と聞いて夢路は、冷や汗をかいた手を布で拭いてから考え始めた。一体、綺羅が何を考えているのか。円陣と近いという一体何なのか。円陣・・・円・・・輪・・・。輪になって何をするのか、輪になってすることといえば、一つしかあるまい。

「円陣なんか組んで、何になるってんだ。皆で仲良くかもめかも

めでもするのかよ？」

「武蔵野、貴様！綺羅様のお考えを愚弄するとは言語道断！この刀の錆にしてくれようか！？」

綺羅の護衛の者の中の一人が、先ほどからの夢路の発言に激しい怒りを覚えていたらしく、両目を充血させ、今にも腰に挿している刀を抜刀しそうな勢いだ。

しかし、夢路はそんなことはお構いなしに、トドメの一発をぶちかました。

「ハッ、やめとけやめとけ、かもめかもめをこの国の全員でやるなんて無理難題は。真ん中のヤツが後ろの正面当てる確率が低すぎるわ」

何でそんなに「かもめかもめ」にこだわるんだよ！！

夢路の付き人の琥珀ですら、思わず叫びそうになってしまった。綺羅の護衛の者たちは、いつの間にか腰に差していた刀をハリセンに持ち替え、ツッコミの素振りをしている。素振りをするたびに風を切る（というよりも断絶するという表現の方がふさわしい）音が部屋に響き渡った。

「あ・・・あの・・・夢路様・・・護衛たちをあまり刺激しない方が・・・

」

「何だ琥珀。円陣つまり、輪といえばかもめかもめだろ。それとも・・・お前は椅子取り遊びの方が好みか？」

「いえ・・・そうじゃなくて・・・」

「派閥争いなら負けねーぜ。最後まで走り抜けるからな」

ああ・・・もう、何をいつても無駄なのだ・・・と琥珀は悟った。

ハリセンの素振りをしている護衛たちをしばらく見ていた綺羅だが、本日の主題を言い忘れていたことを思い出し、再び夢路の方を見つめて語りだした。

「夢路、そなたは限られた人間だけが名乗ることを許される 武蔵野 夢路 の名の意味を知っておるな」

「・・・武の力で神山の夢をを形ある路にしる・・・耳にタコができるまで聞かされたぜ」

夢路は自分の耳に触れ、もう一度「タコ」とつぶやいた。

「そう・・・すべては、我ら神山のため。ということ・・・」

急に綺羅がさわやかな笑みを浮かべたと同時に、夢路は部屋を後にしようとした。これだ、この笑みだ。この笑みをするときは自分

にとってロクなことがない。夢路は今までの人生の中でそう学習していたのだ。

だが、そんな夢路の少ない経験値よりも、綺羅の年季の方が一枚も二枚も上手だった。

「まあ、待て」

綺羅はあわてるそぶりもなく、隠し持っていた装置を取り出し、出っ張った部分を強く押した。

すると信じられないことに、装置を押した瞬間、夢路の頭上にタライが出現したのだ。あまりにも一瞬だったために、夢路は気づかず、そのままタライとランデブー・・・。

「あべし!!」

「だから待てといったのだ」

「痛・・・タライ・・・？ちょっと待て、何だって天井からタライが降ってくるんだよ!」

「最近は何騒な世の中になったものよな・・・」

「防犯対策!？」

綺羅を出し抜くことは到底できそうにない、と夢路は思った。出し抜くことなど、恐ろしくてできないが。

「で、本題に入ろう。夢路・・・そなたには『不破の巫女』と祝言をあげてもらおうぞ」

「何だ、祝言だろうと油だろうと何だってあげてやるぜって・
あ？ああ？あああ？あああ！？」

人の話は、ちゃんと聞けよ・・と付き人琥珀と綺羅の護衛の者たちは夢路を冷めた瞳で見つめたが、当の本人は思考回路がショート寸前、顔色は白くなったり、青くなったり、赤くなったり・・これで黄色も加われれば、某ロボットアニメの機体の色になるほど動揺していたので、そんな冷めた瞳におしおきする余裕はなかった。

「祝言！？祝言ってあの！？」

「そなたも、もう十五・・おかしくはあるまい」

「巫女と祝言・・！？無理だ・・不可能だ・・ありえない・・だ
ってオレ・・」

いつもは斜に構え、人を喰ったような表情の夢路が、あまりにも動揺するので、琥珀をはじめ護衛たち、当然綺羅も疑問に思った。そして各々思考回路に鞭を打つ勢いで、この理由を考え始めた。そして皆・・ある結論にたどり着いた。

「そ・・そなた・・まさか・・そっち系？」

綺羅は自分の体を夢路から遠ざける。琥珀や護衛たちが先ほどまでいた位置より夢路から離れて見えるのは、おそらく気のせいではないだろう。皆、自分で自分の体を抱きしめる体制をとり、夢路を見つめる。

「待て！違う違うぞ！そういうことじゃないぞ！オレは決して男

色、衆道、とは関係ないからな！別に三度の飯よりお前らが好きと
か思っていないからな！」

「・・・思いつきり否定するところが怪しいな」

「ああ・・・」

「何だよ・・・信じてくれねエのか・・・！？感じねエのか！オレの
小宇宙^{コスモ}を！！！」

皆はしばらく考えた。そして、その後深いため息をついて・・・
言った。

「男色のコスモか・・・」

「何かやばそう・・・」

「感じたとしたら、同類ってことだよな・・・」

「そんな・・・俺なんか感じちまったのに・・・」

「うげゝもう金輪際お前とは口きかないから」

話が展開してる！？夢路は、なんだかさびしい気持ち
になった。

「・・・とにかく、男色であっても、男色でなくても、男色であっても、これはもう決めたこと」

「ちよつ・・・綺羅、何で『男色であっても』を二回も言っただよ！
？必要あるの？」

「これを機に、足を洗ってはいかがかな？」

「いやだから、オレは・・・」

夢路は政略結婚とともに、『男色』の烙印を押し付けられてしまったのである。

武蔵野夢路、人生十五年目にして脱・独身をするのか、それとも自分に嘘をつかず、正直に生きて、脱・真人間をするのか・・・夢路の人生は・・・どっち！？

「だから！！オレは男色じゃねーんだってば！」

第一章：脱・独身ゝ失った真人間（後書き）

主人公の扱いがかわいそうですね・・。大丈夫、次はがんばってく
れと信じているから。（他人事！？）

危機を嬉々する機器があつたなら（前書き）

綺羅「夢路、そなたは才能もあるし、まだまだ若い。だから、そなたはここじゃないどこかで能力を発揮すべきなんじゃないかな？」

夢路「ちよつと待て！前回つてそんな遠まわしに解雇宣言される話だつたか！？」

危機を嬉々する機器があつたなら

巫女との結婚など、できるはずがあるだろうか。

屋敷に帰ってからというもの、夢路の頭で、その言葉が絶えず回り続ける。

人払いをしてまで悩み続けることではないのはわかっている。だが、今誰かに会つと、真実を告げそうになってしまうのだ。

自分は、「武蔵野夢路」の名を継ぐのにふさわしい人間ではないということをして・・・。

現在の「不破の巫女」を夢路はくわしくは知らない。今まで通り、優れた予知能力を持つと聞く。

そして・・・かなりの美人らしい。

「ここは普通喜ぶとこなんだろうがな・・・」

決して夢路は美人が嫌いなわけではない、美人の妻・・・大いに結構なことだと思っている。

しかし、困るのだ。過去、現在、未来のどの段階であっても、妻を娶るのは、困るのだ。

かといって事情を説明することはできない、何故、自分が妻を娶ることができないのかを説明した瞬間、自分は「武蔵野夢路」ではなくなるからだ。

「武蔵野夢路」の名は、今まで初代「武蔵野夢路」の直系の者・・・すなわち武蔵野本家が継いでいた。

当然夢路も、武蔵野本家の者である。

もし、自分から「武蔵野夢路」の名前が奪われたら、本家の血は絶

え、分家の者が名前を継ぐこととなってしまふ。

「それだけは絶対に避けねエと、オレは先祖に顔向けできなくなっちまう」

ああ、どうして自分だけがこんな目に・筋違いであるとはわかっていても、夢路はある人物を怨まざるを得なかった。

「もし、あの人が生きていたなら・オレは今・」

「武蔵野の血を絶やさないための、道具とされていたに違いないですわ」

「朱鷺とぎ！？」

夢路の驚いた顔を見て、朱鷺という名の少女は笑ってしまった。

「あらあら夢路様、まるで鳩が豆鉄砲を食らったような表情ですわね」

「朱鷺が急に入ってくるからだろ！？何で・」

このとき、夢路は自分が人払いをしていたことをすっかり失念していた。

動揺のあまり、自分がしたことを忘れてしまったようだ。

何故入ってこれたのかを思いだしたが、時すでに遅し。

頭をかくて、夢路が恥ずかしそうにうつむいたので、朱鷺は更に笑った。

「あゝ・そうだった・オレが自分で・」

「人払いをなさったの、思い出しました？」

「不破の巫女」との件を聞かされてからというもの、普段なら決してやらないようなことをやってしまう自分がいることに、夢路は気づいていた。

いつものように、斜に構えた自分であることが難しい。

「何だかもう・・・滅茶苦茶だ」

「神山様のお話がそれほど夢路様を追い立てるようなお話だったのですか？」

「ああ、一巻の終わりだ。二巻は始まらない・・・打ち切り以下だクソッ」

「一体、神山様は夢路様に何をおっしゃったのです？」

「それは・・・」

夢路は、神山綺羅が話したことを朱鷺に告げた。

「あらまあ・・・巫女様と」

「朱鷺・・・オレはどうすればいい？」

「巫女様を奥様にする以外に答えはないと思いますわ」

確かに、そうなのだ。神山綺羅に逆らうということは、大和国すべての人間を敵にまわすようなものだ。そんなことをしたら、その先の結果は見えている。

「オレだつてわかつてる・・・けどな・・・オレが巫女と祝言をあげたりしたら、お前だつて困るだろ!？」

「それはそうですね!だつて私は夢路様の・・・」

危機とは続くもので次の瞬間、夢路は更なる窮地に追い込まれることになる。

「あの～お取り込み中すみません」

「そんな馬鹿な・・・たわばっ!!」

突然入ってきた従者の言葉に、夢路は、どこかで聞いたことのある断末魔・第二段を発してしまった。

「夢路様、不破の巫女様がお越ししております」

「ふわのみこ・・・附和の魅粉・・・不破の巫女おおお!？」

「は・・・はい。何でも、夢路様にお会いしたいとか」

危機が、危機を呼ぶっキキー。

危機を嬉々する機器があつたなら（後書き）

・ハジけすぎました。（いくつだよ前）

題名も駄洒落、最後も駄洒落、どこことなく香るのはオヤジの香り・

！最低じゃないか・。

・次はまじめにできたらいいな（希望かよ）

上から読んでも、下から読んでも（前書き）

従者「夢路様、お届けものです」

夢路「ん？何だ？・・・差出人不明、生ものなので注意・・・つたく面倒だな・・・ん？『巫女在中』！？確かに生ものだけだよぉ！！？」

上から読んでも、下から読んでも

「・・・今、何て言った？」

「は？その・・・不破の巫女様が、夢路様にお会いしたいと言っております」

何ということだろうか！現在の段階で一番会いたくないヤツが、会いに来たなんて！

最近流行りの空気読めないとは、こういうことだったのか。

まさか自分が身をもって知る日が来るとは、夢路は夢にも思っていなかった。

だが、ここで慌てた素振りを見せては怪しまれる。ここは余裕の表情を見せてやり過ごそう。殺られる前に殺る。慌てる前に慌てさす・・・。慌てず、騒がず、美しゅう・・・どこかで聞いた言葉だ。

「会いたいだって？ああ、いいさ会ってやろう。で、今巫女はどこに？（来ないでください。来ないでください。本当に来ないでください）」

我ながら嘘をつくのが上手いと、夢路は思った。それにしても、口と腹が違いすぎる。

「今、夢路様の屋敷の前まで来ておりますが・・・」
「うぐっ」

今の夢路の心情は、抜き打ちで持ち物検査をすると伝えられた日に限って、いらないものをもってきた時の心情と似て非なるものである。が、しかし、それと近く、また同様と言って過言ではない。（

学者はこういう言い方を好むものだ）　わかりにくい

「呼んできましようか？」

「駄目だ！上から読んでも、下から読んでも、駄目だ！！」

ああ、オレ、今上手いことを言ったな・・・なんて感心している場合じゃない。愛は地球を救うかもしれないが、上手い言葉は世界どころか、自分自身さえ救ってくれない。数秒の間面白いだけなのだ。

「お前、夢路様は、身だしなみを気になさるお方なの。それが祝言をあげる相手が来ているとなれば、尚更そうですわ。だから巫女様に、しばらくお待ちくださいと伝えなさい」
「は、はい！」

夢路があたふたしている間に、朱鷺が従者に巫女の足止めをするように命令した。足止め、とは言ったものの、あまり時間をかけては怪しまれるだろう。

「・・・助かったぜ」

「安心して居る場合ではありませんわ。さあ、早く、お召し物を普段着から正装に・・・」

「わかってるって・・・今は誰も入って来ねえだろうから、コソコソ着替えなくてもいいよな？」

「・・・お召し物を脱いでからいうことではないと思いますけど」

最初からそのおつもりでしょう？と、朱鷺は、ため息をついて言った。

「・・・夢路様」

「何だ、朱鷺・・・」

もはや半裸と言ってもいい状態の夢路が、朱鷺の方を見つめる。朱鷺もまた、夢路を見つめる。二人はどちらも、艶のある笑みを浮かべて、笑う。

「決して・・・決して、巫女様に心を許さぬように・・・心を許せば、夢路様の秘め事を知られることになりますわ」

「ハッ、オレがそんなヘマすると思うのか？」

不敵な笑みを浮かべる夢路の言葉を一蹴するかのように、朱鷺は続けた。

「ええ、夢路様は甘いところがおありですから」

「・・・オレって信用ねエのな」

夢路は、正装の着物を身にまとうと、頭をかきつつ、苦笑いをした。

「だから、私がいるのですわ」

「・・・ある時は、武蔵野夢路の世話係」

「そしてまたある時は・・・」

朱鷺は、着物の袖に手を入れ、中に仕込んでいた針のようなものを取り出し、部屋の壁にそれを投げつけた。ただ、壁に投げたわけではない。針は、壁を徘徊していた蜘蛛の頭へと、突き刺さっていた・・・。

「武蔵野夢路の裏事情を知ったものを影で暗殺する『始末屋』・・・」

だろ」

「たとえ大和国を不落としてきた不破の巫女でも、夢路様の秘め事を知ってしまったなら・・始末するしかありませんわ。まあ、そうならなければいいのですが」

「知られないよう努力はしてみるさ。もうこれ以上、お前の手を汚したくない」

そう言った夢路の表情は、どこかつらそうだった。それに対し、朱鷺は、まるで気にする必要はないと、語るように微笑んだ。

「・・・そう思うなら、決して心を許されますな」

「ああ、わかってるよ。オレが武蔵野夢路であり続けるためにも」

正装に着替え終わった夢路は、自ら不破の巫女を出迎えに行った。

定石なんて相手もわかってないと駄目（前書き）

夢路「ついに不破の巫女の登場だ！野郎共、丁重に出迎えてやりな
！」

野郎共「おおー！！」

夢路「茶の用意は忘れるな！座布団はやわらかいヤツだぞ！あつ、
テーマ熱々のお茶なんぞいれやがって・・・巫女が火傷したらどう責
任とる気だ」

朱鷺「・・・本当に丁重にお出迎えするなんて。皆様不良みたいなお
姿ですのに」

定石なんて相手もわかってないと駄目

「お待たせして申し訳ない・・・貴方が不破の巫女か・・・？」

屋敷の玄關にいた不破の巫女を見た瞬間、夢路は言葉に詰まった。隣にいた朱鷺も思わず、「まあ」と艶っぽいため息をついてしまう。

「大変な美人だという噂は本当だったらしいな」

不破の巫女は、大和国の人間にしては珍しい白髪（近くで見れば金にも見える）に、淡い紅の瞳の、夢路より少し年上の女性であった。そして、今まで見てきた美人と何処か異なる印象を受けた。

紅、という点では夢路の髪もそうなのだが、これは武蔵野の由来を知られば当然のことである。

「そんなことは・・・」

不破の巫女は、白い頬を朱に染めて、俯いた。そんな姿もまた、妙に美しい。思わず見とれそうになるのをこらえて、夢路は巫女に言った。

「しかし、何故今日我が屋敷に参られたのです？それもお一人で・・・」

「それはその・・・お話したいことがありまして・・・それで・・・」

巫女の話したいこととは、一体何なのだろうか。とりあえず、応接間まで巫女を連れて行くことにした。

巫女を連れてきた従者は、役目を終えたので屋敷から立ち去った。しかし、朱鷺達屋敷につかえている者の仕事はこれからだ。

「朱鷺殿、夢路様と巫女様に出すお茶菓子を用意してまいります」

「頼みますわ」

下女が茶の用意をしに言ったのを見計らってから、朱鷺は誰もいないはずの廊下で声を上げた。

「・・・どちら様でしょうか？ここは夢路様の屋敷にございますわ。私の気が高ぶらないうちにお帰りいただけませんか？」

返事はない。考えすぎなのだろうか・・・いや、そんなはずはない。

朱鷺は確かに感じた。

間違いない、今この屋敷に何者かが息を潜めているのを察した。だが、一向に返事はない。

それもそうだろう。相手とて馬鹿ではない。ここはやり過して、相手に気のせいと思わせるのが、闇に潜む者の定石だ。

「・・・でも、定石道りも考えものですわよ？それに、相手がいつも定石に応えるとは・・・限りませんわ」

次の瞬間、朱鷺は何処へと消えていた。

「夢路様、お茶菓子を用意いたしました」

「ああ、すまねえな」

下女が、応接間の机の上に茶菓子を置いた。茶は注いだばかりなのか、白い湯気が天井へと昇っていく。

「口に合うかどうかかわからないが・・・」

「ええ、ではいただきますね」

巫女が、ふわりと笑った際に、夢路はどうしたらいいのかわからなくなってしまう。今まで、美人を見たことなんて何回もあるというのに。

そして、それと同時にある罪悪感が胸を締め付けるのがわかった。

（オレでは・・・巫女に・・・）

心の中で、罪悪感が最大になる前に、巫女が用意した茶を一口飲み終えてから、言った。

「おいしいお茶ですね」

「そ、そうか。そういつてもらえると、用意した下女も喜ぶでしょう」

「夢路さんは、お優しい方なのですね。目下の者のことを気にかけるなんて、武家の頂点に立つ方がするとは思いませんでした」

「い・・・いや・・・自分は・・・」

ことが知れてしまったら、自分はもしかしたらあの下女と同じ立場に立つことになるかもしれないと思うと、目下の者とは思えないのだ。いや、もっと悲惨なことになるかもしれない。

「何をそんなに怯えていらっしゃるのです？」

「っ・・・」

感づかれるのも無理はない、と夢路は思った。自分でも動揺しているのがわかるのだから、他人から見れば、なおわかるはずだ。ましてや、相手は特殊な力を持つ巫女なのだ。だが、今、夢路は怯えているのではなかった。怯えというよりは、先ほども述べたように罪悪感が夢路を動揺させているのだ。

「・・・すみません・・・」

「え・・・？」

どうして巫女が謝るのか、夢路にはわからなかった。それでも、巫女はもう一度、「すみません」と告げた。

「夢路さん・・・貴方は神山様から祝言のお話を聞かされたと思います」

「・・・その通りだが・・・」

「あれは神山様が提案したではありません。・・・私が、提案したのです」

「！？そりゃあ・・・何でまた・・・」

夢路に謝罪したと同時に頭を下げていた巫女が、頭を上げて、言った。

「不破の一族を・・・滅ぼしたくないからです」

静かな部屋に、凜とした巫女の声だけが、響いた。

鳩が蛇を喰らう(前書き)

夢路「今回はネタ切れらしいぞ」

朱鷺「まあ、だらしないこと」

夢路「この次の話でタネあかしするらしいぜ」

朱鷺「ネタとタネ・笑えませんか」

鳩が蛇を喰らう

「不破の巫女の一族が滅ぶだって？・・不破が絶滅危惧種になったなんて話は聞いたことねエな」

「そうでしょうね。だって人に話したのは貴方が最初ですから」
「な・・・」

一本とられた・・！しかも、こんな大人しそうな巫女に・・！顔に似合わずやるな・・と夢路は思った。

「そんな鳩が蛇を喰らったみたいな顔しないでください」

「どんな顔だそれは！喰らったはどっちの意味なんだ！？ぶつけられたのか、それとも本当に喰ったのか！？」

「・・それは・・秘密です」

・・どつかの神官みてーなこといいやがって・・。

夢路の怒りは最高潮に達していた。

まあ、怒りといっても本当に怒っているわけではないが。

「で、オレの顔のことより、絶滅危惧種の不破さんは何で、オレと祝言をあげようと思っっているんだい？」

「・・それは・・・不破の血を絶やしたくないからです」

「ウオイ！振り出しに戻すつもりか！言いたいことは、はっきり言えとオフクロさんか人生の師匠に教わらなかったのかい？」

夢路が言いたい放題言った後、巫女は少し黙ってから、言った。

「母は・・先代の巫女は今は幽閉されています」

「！？幽閉・・？」

そんな話は聞いていなかった。

それに、「不破の巫女」は「武蔵野夢路」同様、死ぬまでその名を受け継ぐと決まっていたはず。

今まで、その名を受け継いだものの中に、途中で名を剥奪されたものはいないと思っていたのだが・・・。

「母は、私が産まれる前から・・・おかしくなっていたんです。長きにわたる近親結婚のせいでしょうかね・・・心が・・・壊れてしまったんです。体の限界が来るより遥かに早く・・・」

だから、母は幽閉されたのだと、巫女は夢路に告げた。

先代の巫女の話も、夢路はよく知らなかった。

幼かったせいもあるだろうが、ただ、気がいたら今の巫女・・・つまりは、今自分の前にいる人物が後を継いでいたという記憶しかない。

周りの人間も確か「巫女は死んだ」と言っていたはずだ。

「なるほど、幽閉という形で上手くもみ消したってわけか」

「母の場合は・・・ね。ですが、不破の一族は今、近親結婚が原因で状況は悪くなる一方です。精神、肉体に異常をきたす者も・・・増え続けています。私の・・・この姿とてそうです」

巫女は、長く伸びた白髪の一房をつかんで、ため息をついた。淡い紅の瞳が潤んでいるように見えるのは、夢路の気のせいではないはずだ。

「それも近親結婚の結果ってことか・・・」

「おそらくは・・・実際にそうなのかはわかりませんが、おそらくは・・・」

巫女が着物の袖をすつと持ち上げると、そこには、巫女が夢路と同様に秘密を抱えていることの証明があった。

「・・・お前・・・そりゃ、まさか・・・」

あの後、姿を消した朱鷺は、忍び込んだ者の気配を探り、見つけることに成功していた。

「ようやく見つけましたわ。あまり手間取らせないでくださいな・・・」

朱鷺の怒りに満ちた声に、隠れ続けることに限界を感じたのだろうか、忍び込んだ者は観念して自分から出てきた。

「探してくれとは、言っていないけど？」

全身を黒ずくめの、いかにも密偵といった容貌の男がけだるそうに言った。中肉中背、どこにでもいそうな青年である。

だが、密偵の場合、目立たないほうが何かと都合がいい。どこにいても溶け込める、「当たり前」の雰囲気があれば、情報収集をする面で不便であるからだ。

「貴方・・・巫女の始末屋ですの？」

この黒ずくめの男から、自分と同じにおいがしてならない。朱鷺は、そう感じていた。

男は、口を見せない衣装を着ていながら、あきらかに、笑ったのがわかった。

「教えなうい」

「・・・知りませんでしたわ、巫女の始末屋は、拷問がお好きだなんて・・・私、拷問の知識はあまりありませんけれど、精一杯・・・やらせていただきますね」

「いや、結構」

男はきつぱりといった。先ほどは笑っていた顔が、今は少々引きつっている。

「まずは何がよろしいですか？鞭打ち？剥皮？凌遲？私のお勧めは剖腹ですが・・・どれが・・・」

「本当に結構・・・です。うわあ、どれも最悪じゃないのさ。鞭打ちがまだやさしい刑に思えてきたよ」

「なるほど、たたかれて快感を感じる・・・と」

「ちよつとちよつと、何勝手なこと言ってるのさ」

観念して出て行くと、そこは、拷問の国でした。

「さて、お遊びはここまでです。答えなさい。何の用があつてここに来たのです？巫女は今日、何をしにここに来たのですか？」

「巫女から聞かなかつた？おたくらのとこの大将に会いに来たのさ」

「会いに来たとは聞いています。ただ、それを鵜呑みにするほど、私はお人よしではありませんの」

「・・・本当に会いにきただけと思うよ？それとも、会いに来ちゃ困るわけ？」

そうだ、困るのだ。巫女が会いに来て、夢路の秘密に感づかれてもしたら困る。

しかし、巫女に感づかれる前に、この男に自分が今動揺していることを悟られるだけは避けたいと、朱鷺は思っていた。

こういう男は、つけ込んでくるのだ。
朱鷺は、必死に平常心を保とうとした。

「ええ、困りますわ。しかも、屋敷に始末屋まで忍び込んで・・・もしよその間者と間違えて・・・ああ、これ以上とても私の口からは・・・」

「アンタ・・・見かけによらず、恐ろしいこというねえ・・・さっきから」

「あら、私は始末屋ですから」

始末屋がただのきれいな娘では意味がない。美しかろうが、醜かろうが、命令に執着し、必ず相手を始末する。それを満たしていればいいのだ。

「・・・それよりね、おたくが巫女を疑うのは勝手だけどね。巫女は、本当に会いに来ただけだと思うよ。不破は武蔵野をどうこうしようなんて考えちゃいないさ」

「さて、獣咬の準備をしてきましょうか」

「本当に本当だって！誓っていいもい。今の段階で、巫女が不破の屋敷から抜け出したことを知っているのは、巫女の・・・密偵の俺たちだけさ。そして・・・あの人は・・・おたくらの大将を確かめに来ただんと思う」

黒の着物に身を包んだ男は、巫女の密偵であつた。

これは嘘ではないのだろう。朱鷺は少しだけ、この男を信じることにした。

「仮に貴方の仮説が正しいとして、何を確かめるといふのです」

「・・・武蔵野夢路が、巫女の秘密を共有するに値する人物なのか

を
」

二人の自白（前書き）

夢路「随分と・・・間があいたな」

朱鷺「仕方ありませんわ。作者が修羅場だったのです」

夢路「・・・試験か」

朱鷺「ええ」

夢路「オレの秘密、やっぱりバレるかな」

朱鷺「至難です」

二人の自白

「お前・・・それは・・・」

夢路は、巫女の顔を見つめた。巫女は夢路に見つめられても、特に表情は変化しなかった。

「わかつてもらえたでしょうか・・・これが私の・・・貴方に話したかったことです。・・・不破という名前は今では皮肉としか思えません」

「ああ・・・確かに」

「・・・血族結婚をこのまま繰り返せば、不破の力は『破られる』ことはないでしょう。ですが、このままでは、不破は内側から『破れて』いきます」

「確かにそうだろうな。だが、巫女・・・その体では子を成すことはできねえだろ。お前の体では、男のオレとの間に子は産まれない・・・」

着物の袖をまくった巫女の腕には、点々と浮き出る内出血があった。ただの打撲では、あそこまで酷い内出血はできないだろう。

「血友病は、古来より男児に多い病・・・神山も永きに渡り血族結婚が行われているから、同じような症状を持つものを見たことがあるお前は・・・」

「女子は皆、死んでしまったのですよ。・・・僕が今不破の中で若い命です」

夢路はここで初めて納得した。

初めて巫女を見たときから、美しいとは思ったが、他の美女とは

どこか違った色気のようなものを感じていた。

まさか、男だったとは。

だが、これはこれで都合がよい。これなら、自分の秘密を知られても、困ることはない。

朱鷺が、巫女を暗殺する必要もない

「何で、オレに話す気になった」

巫女を演じ続けてきた青年は、美しく笑ってから言った。

「この話は、僕から持ちかけた・・・なのにその僕が話さないのはおかしいでしょう？」

「最初から話すつもりだったのか」

オレは秘密を最後まで話すつもりはなかったというのに。ああ、この男は、武人であるオレよりも肝が据わっている。知られることを恐れてはいない。

夢路は敗北感のようなものを覚えた。しかし、不快な敗北感ではない。それどころか、自分の伴侶となる人間が自分より強い人間だということに、安心にも似た感情が沸いていた。

「・・・強いな・・・」

「いいえ、僕は弱い人間です。不破が滅ぶのを黙って見ていることができないから、武蔵野を利用しようとした・・・不破の人間でなければ誰でもよかったです・・・ずるい人間でしょう？ 酷い人間でしょう？」

「いや、それでいいんだ・・・不破が滅ぶことは許されない、もちろん、武蔵野が滅ぶこともだが・・・」

「・・・僕と貴方では、子を望むことはできません」

巫女は悲しそうに言った。

「いや・・・そうでもないぞ・・・」

「え・・・？」

夢路は、覚悟を決めた。決めざるを、得なかった。

場面は移って、朱鷺と男の会話。

「巫女様は随分と行動的なのですね」

「不破のためなら何でもする。そういうお人さ・・・そうでなきゃ、男の身で武蔵野の当主の嫁に行くなんて言わないさ」

「男・・・？」

朱鷺は啞然とした。ひょっとしてこの男、自分の主君の秘密をあつさりと言ってしまったのではないだろうか・・・いや、気のせいではない、明らかに今「巫女は男」だと告げた。

「不破以外の家なら、どこでもよかったんだろうけど、今信用できるのって武蔵野だけなんだよね」下克上の時代が憎い！」

秘密をバラしたというのに、まったく気にしていない男に、朱鷺の苛立ちは募っていく。自分にはできない芸当をこの男はやってのけた。それが朱鷺には許せなかった。

たとえ夢路に命令されたとしても、自分にはできない。真に信用

した相手に告げるよう言われたとしても。

「武蔵野を選んだ理由なんて、どうでもいいですわ！」

「え？結構重要じゃないのさ」

「それよりも！どうして貴方は、巫女が男だと私におっしゃったのですか」

自分には理解できない行動をする動機を、朱鷺は知りたかった。

男は、朱鷺の青ざめた顔を見つめると、その細い顎に手を置いてみせた。知らない人間に、まして、男にこんなことを許したことはなかった朱鷺は、屈辱を覚えてはいるものの、動くこすらできなかった。

「アンタと取引がしたくなった」

「な・・・何を・・・」

「アンタ、今まで怪しいと思ったヤツは全員殺してきた。だから、悟られるってこと、なかったと思う。・・・違う？」

朱鷺は確かに、今まで、自分が怪しい、夢路について疑問を持っていると思ってた人間を必ず死に追いやってきた。

悟られる前に、相手を殺してきたのだ。悟られるということが、あろうか。

「間違いなくアンタは、主君の秘密を知ってるさ」

「・・・！」

朱鷺はすばやく、男の手を振り払うと隠し持っていた小刀を男の喉に突き刺そうとした。しかし、男も素人ではない。小刀が自分の喉に突き刺さる前に、朱鷺の腕を掴んで止めた。

「安心しなつて。巫女の秘密を外に漏らさなきゃ、おたくの大将の秘密も墓場に持つてくからさ。だが・・・もし、言えば・・・」

「・・・貴方が私を殺すというんですの？」

「そいつは、もうわかつてるだろ？」

勝手な人間だ。朱鷺は思った。まだ自分は秘密を言うとは言っていないのに、いきなり取引だ、などとふざけたことを言っている。

しかし、巫女が男だということは、いずれわかることだった。それと同様に、夢路の秘密もいつかはあの男に知られてしまう・・・だったら、今ここでいうことも、後で知れるのも同じではないのか。

「貴方の言い分はわかりましたわ。ですが、私の口から夢路様の秘め事を言うことはできませんの。・・・知りたければ、夢路様から聞いてくださいな」

「あらら、そうなっちゃうわけ。じゃ、そろそろ巫女様を迎えに行きましょう・・・と、いいたいところだけど・・・」

朱鷺と男の周りを、謎の集団が取り囲んでいた。

危うし！主人公！！（前書き）

夢路「……………」

朱鷺「どうしましたの？」

夢路「…これ、誰が主役だ？」

朱鷺「夢路様でしょう？」

夢路「…何で名前も公表されていないヤツが出しゃばってんだよ・

・このままだと題名が『NANASHI』になるぞ。どっかの忍者漫画かつての」

朱鷺「夢路様も忍者に憧れていらっやいますの？」

夢路「実はそうなんだってばYO！」

危うし！主人公！！

謎の集団に囲まれた。上は50才、下は10才。守備範囲が広いにも程がある。数は30人程、小学校の人クラス分だ。

「貴方のお仲間ですわね。道理で話が上手いと思いましたもの。これから死ぬ人間に何を知られたって構わない・ってことですか？」
「いや？俺たちのお仲間はあんなに守備範囲広くないよ」
「まあ、ではあの方達は派遣社員ですね？」

そうじゃねーよ！！

男は、ツツコミたい気持ちを何とかこらえて朱鷺に言った。

「派遣でも正社員でもないって・俺たちあんなヤツら知らない」
「まあ、この期に及んで・！とぼけるのですか！？」
「どういえばアンタは納得するのさ！？」

謎の集団が登場も、今のこの二人にはあまり関係がないようだ。
謎の集団は相手にされずに少しさびしきものである。かまってくれよという瞳で、朱鷺たちを見つめるが、まったく相手にされていない。

「随分余裕みたいだけど、甘いんじゃないの？雛菊率いるこの「杏子集」から逃げられるわけないでしょ」

謎の集団の中にいた女の子が、朱鷺と男の間に入って、言った。
雛菊と名乗る女の子は、まだ12、3歳といったところで、明らかにこの場に不釣り合いだ。

「そりゃ、杏子は甘いさ。お嬢ちゃんはおうちへ帰りなさい。」
「甘々ですわね。どうしたんですの？道に迷ったんですの？大丈夫ですわこの森からは何人たりとも逃れられませんか？」
「オイオイ、全然大丈夫じゃないじゃん」

なめられている、と悟ってしまった雛菊という名の少女は顔を真っ赤にして周りの味方に命令した。

「やつちやえー！ー！！」

杏子集を名乗る集団は、容赦なく朱鷺達に襲いかかる。

「ハッ！登場した段階で名乗れてるからっていい気になんないよねー！こちとらまだ名無しだからなー！ー！！いい加減名乗らせろー！ー！！」

そういえば、そうでした。大丈夫、今回明らかになるはずだから！！

「権兵衛さん、落ち着いてくださいな。貴方には権兵衛という立派な名前が・・・」

「現在進行形で名無しだからって権兵衛呼びわりかよ・・・お約束すぎじゃないのさ・・・」

この後、権兵衛呼びわりされて落ち込んでいる男に更にトドメをさすかのよう、雛菊が悪気なく失礼発言をしてしまう。

「権兵衛！この雛菊ちゃんを子供扱いした罪は重いんだからね！」
「お前も俺っちのコト権兵衛呼びわりかい！！」

もう我慢できなかった。これ以上我慢すると、俺っちの何かが、爆発しちゃう気がする・・・（後日談）

男は、雛菊の頭を思いつきりたたいた。流石に女の子の顔を拳で殴ることはしなかった。というより後が怖くてできなかった。

「いったあ・・・何すんのよ！おっ父にもぶたれたことないのにー！！」

「ぶたれないで大人になったヤツがどこの世界にいるんさ！！」

もう一撃、追加。

「二度もぶった・・・！」

「ああ・・・ぶったさ」

振り返ると、朱鷺が「うつわ最低」と言いたげな顔でこちらを見ていた。ああ、登場わずかにして「女性にも平気で手を挙げる男」になっちったよ・・・。まだ名前も公表されてないのに・・・。

「女子の体をぶつなんて・・・最低ですわ」

「・・・原因作ったのは、あんたさ。あんたがあの時俺っちのコト、権兵衛って呼ばなけりゃ・・・」

こんなことにはならなかったのに・・・それが悔やまれる。

「それはすみませんでした・・・土左衛門さん」

あれ？これ昇格？降格？もう、女なんか嫌いだ。

襲い掛かってくる集団を殴り飛ばしながら、男はそう思った。

「あーんもう・・・杏子集、ボロボロだよ・・・まっ、でもいいか」

「よろしいのですか？残りは貴方一人・・・ここで見逃すと思ってるのですか？秘密を聞いてしまった貴方を返すほど、私は甘くはありませんわ」

朱鷺は、雛菊に歩み寄ると、一体何本持ち合わせているのか、小刀を取り出し、雛菊の首筋へとむける。

しかし、雛菊は特に応戦するでもなく、言い放った。

「秘密？そんなの知らなくてもいいもん。どうせアンタたちの主人は、あの方にやられちゃってるに決まってるし」

「あの方？」

「誰さ、そいつは」

朱鷺と男の表情が一瞬にして険しくなった。今にも、雛菊を焼いて食いそうな雰囲気である。

「そこまでは言えないのゝ雛菊はそのサイテー男みたくお喋りじゃないからあ」

「誰がサイテーだ、誰が・・・おしゃべりだと・・・？オイ、小娘、三発目を喰らいたいのか」

「あら、三発目は、私がさしあげますわ・・・なんなら四発目も私が・・・」

大人ってのは、せこい生き物なんだなこれが。

「あう・・・そ、そんなに睨まれたって教えあげない！雛菊の任務はこれでおしまい、時間稼ぎに引っかけられてくれてありがと！じゃねっ！！」

大人ってのは、しつこい生き物なんだな、これが。

そう簡単に返すはずがないのであった。朱鷺が雛菊の右足を、男が左足を思いつき引つ張った。帰ろうとしていた雛菊は、バランスを崩し、そのまま地面に倒れた。

「ひゃん！」

「まだ・・・お帰りの時間には早いんじゃないのさ？」

「任務が終わった今なら、何を話そうと、しようと、構わないんじゃないありませんこと？」

黒い大人が、襲い掛かってくる。黒い大人が、襲い掛かってくる。黒い大人が・・・。

「いやあああああ！！！」

少女の悲鳴が森の中にこだました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5647c/>

大和国草子

2010年10月8日11時48分発行